尾崎喜八資料

創　刊　号

Contents

星座／尾崎喜八――――――2

＊創刊に寄せる言葉＊

埋れかけの木の実／串田孫一――――――3

発足によせて／北川太一――――――3

作品の生命ということ／伊藤海彦――――――4

＊研究と資料＊

雑誌『フィルハーモニー』における尾崎喜八――――――6

同・解題／勝畑耕一――――――15

尾崎喜八の放送関係資料保存について／堀 隆雄――――――17

新聞・雑誌掲載目録(一)、大正四年～大正十二年――――――18

同・附記／嘉納忠明――――――20

＊

表紙題字／草野心平

尾崎喜八研究会

昭和60年2月

ピエール・ジャン・ジューヴより送られた自筆草稿を手にする尾崎喜八（1926年・撮影／中西悟堂）

星座

（「詩聖」大正十一年九月号）

晴れた夏の夜の南の空で、
三本の毒牙をあらはした「蝎」が
銀にかゞやく尾の尖端をきりきりと巻きあげ
天頂めがけてその巨大なからだをのしてゐる。
下の方、波の飛沫のやうに廣漠とけぶつて光るのは
「ケンタウルス」か「狼」の、灰のやうな天體の微塵、
その下にくろぐろとうねりを打つ松の丘は
「蝎」のしたたらす水の雫に濡れるかと思はれる。
彼のつよい肩のうへに
らんらんと輝くたいまつのやうな星がある。
火星だ。その火の玉が彼の急所を燒きつけるので、
「蝎」はぐるんぐるんとのたうつて
あたりに珠を綴る星座の網を引き裂きさう。
風が來る、幅のひろい風が海の方角から。
オゾンを含んだ風は窓を吹きぬけて庭へ出る。
木立にかこまれた庭の上は天の青さも殊に深く、
目もあやな星の花野を銀河が涼しく流れてゐる。
月のない夜はいつ更けるとも分らぬ、
星に向つてあけ放して窓の前で私の仕事のはかどる事よ。
しかしやがて氣がつけば天の穹窿は大きく傾いて、
打ち倒されたゴライヤスのやうな「蝎」が
その巨體を青じろい地平線の方へのめらせてゐた。

埋れかけの木の実

串田孫一

故人の意志を誤りなく知ることは極めて困難である。生前に自らはっきりと語られた事柄についても、これを鵜呑みにする訳には行かない。ジャン・ポーランが古い手紙の公表を薦めた折にポール・ヴァレリーが躊躇することなく、「自ラヲ裏切ル義務ハ誰ニモナイ」というラテン語の一句まで添えて断ったことを想い出した。一人の詩人を敬愛する者としては、故人の意志の解釈にも拠ることだが、落とされた儘、人の目に触れずに埋もれかけている木の実がある筈で、これを探し出して、単に好事家の満足のためばかりでなく、多くの研究者の資料として公表したいという願いが起こるのも当然である。

詩人尾崎喜八の研究はさまざまの角度から進められるが、使われている言葉の密度だの、その用法だのから考えると、未熟故に自ら振り落とし、敢て消滅を望んで破棄されたものを、多くの人々に長く美味なる滴りを与え続けている詩句と同列に置いて、無差別に引用や註釈の対象にされるようなことが起こり得るかも知れない。

研究はどのようなものであっても厳密でなければならず、傷付けることを恐れると同持に、一層の光沢を願って徒らに磨き立てるというのも考えものである。

今埋もれた儘になりかけた尾崎喜八に関するあらゆる諸資料が探し出され報告されて行くことになったが、これらの資料の取扱いについては慎重でありたい。そして慎重である限り、この資料をよく利用することによって、これまで私達の親んで来た諸作品の新しい解釈が生まれる可能性も出て来るし、詩人の生涯の一層の深さを知ることが出来る。

それに拠って富まされるのは私達であることも忘れてはならない。

発足によせて

北川太一

いま秋十月、いつの間にか木の実がみのり、熟れてゆくように、いかにも自然に尾崎喜八研究会が発足し、『尾崎喜八資料』が発行されるというれしい便りが、ミュンヘンに出発する直前の勝畑耕一さんから届きました。

あの一途で純粋な詩魂を育てた詩人が、限りなく愛したこの地上を旅立たれてから、もう十年の歳月が流れます。その間にも、実子夫人や栄子さん、お孫さんたちまでを含めて、いつくしみ深い守護神のような詩人をいまも囲む尾崎家の日々や、例年の蠟梅忌につどう詩人を知る人々の思いは、このことを実現させた前史というにふさわしいでしょう。

自然を愛し、音楽を愛し、何よりも人間を愛した、優しくて、剛毅で、気稟に満ちたこの生活者の全貌を、よりよく生きることを願う、あらゆる人々への遺産とするために、その人柄と業績を余さず次の世代に手渡すことは、詩人を知り、詩人を愛する者たちに残された仕事です。

伝えるべき資料は、いまこの瞬間にも失われてゆきます。私たちは、尾崎喜八の生涯を記録するために、分秒を惜しんで、湮滅に帰するかも知れない、年譜や著作やあらゆる分野の資料を、時に抗ってつなぎとめなければなりません。

時間のふるい分けを経て残されたそれぞれのものは、意味ある、優れた、かけがえのないものです。しかし、その努力をおこたれば、かけがえのないものもまた滅びるのです。私はいつも宮沢賢治の例を思いうかべます。亡くなった時の賢治は、無名の、一地方的な詩人、農学者でした。その賢治が賢治の全貌を現わし、人間全体の宝となるまでに、宮沢清六さん、草野心平さん、高村光太郎さんその他、どんなにたくさんの人達が、その人と遺稿を大事に守り、伝え

るために力をつくしたことでしょう。

新たに始められる作業のためにも、形式はさまざまであれ、対象への愛に結ばれたたくさんの人々の――これは一人で出来る仕事ではありません――無私で献身的な、長い時間をかけた共同作業が必要になります。私の経験から言えば、終りのない無限運動といってもいいほどの。そして、はじめに書いた、一刻を争って、大急ぎでという原則とは裏腹に、そのためにこそ、落着いて、腰をすえた、持続のためのねばり強いエネルギーが求められるのです。

はじめるのは簡単なことです。しかし、持続するのは、大変だということ。出発にあたって、そのことはどうしても、おなかの底にしまって置かなければなりません。そして、みんなが、それぞれの場所で、身のまわりにあり、またみつけた資料を、そのつど、まめに、みつけ次第、一定の場所に報告し、整理してゆくこと。尾崎家がその場所を引きうけ、嘉納忠明さんや堀隆雄さん、勝畑さんのような熱心な研究者がその整理にあたって下さるということを、どんなに心強く思っているかしれません。

ついでに書きそえますが、資料はどんな断片隻語でも、どんなささいな周辺資料でも、尾崎家にお送り下さることを望みます。実際、ほんの小さな言葉一つが大きな出来事をあかす鍵になることが、しばしばあるのです。その資料集積の網の目が、広く、こまかく、気長に発展してゆけばいいと思います。

そんな蓄積された資料の上に立って、新しい研究活動もいきいきと始められるでしょう。正確な資料の上に立たない研究は、ねうちがありません。しかし誤解があるといけないのは、どんなにたくさん、かけめなく資料が集められたとしても、それだけでは人のいのちは伝えられないという、むしろ当り前の事実です。文字に記されたことは、正しく、確実に見えます。でも、たとえば、どんなにたんねんな日記が残されているとしても、完全な表現というものはあり得ません。「何かに本当に夢中になっている時は、日記もつけず、手紙も書かない」といつか高村さんは言われました。いくら精密な年譜が編まれても、資料の重みの判断とともに、その行間の空白の重大さを忘わないわけにはゆきません。

個性的な研究者が、それぞれの探り針を用意し、この詩人の世界を探ること。むしろ自分も群盲の一人だという謙虚な意識を持つ、誠実で、光彩ある研究者の協力の上に、星座のような尾崎喜八の世界が、次第に、鮮明にうかびあがること、そのことこそ願わしいのです。

最後になりましたが、これらを実現し、集められた成果を伝達するための、経済的な基礎も大切です。何しろ、片々たる古雑誌一冊に数万円の値がつくという昨今です。照れずにきちんと組織だてること。力をあつめれば、一人一人の分担はすくなくて済みます。どこかに無理があれば、きっと破綻します。

『資料』の最初の号がお手もとに届く今度の蠟梅忌は、詩人研究に一つの時期を刻むでしょう。お元気な実子夫人の聞き書などが連載されるのも、楽しみの一つです。ともあれ、研究会の前途に、心からの喜びをこめて、熱い期待をお送りします。

昭和五十九年十月十六日

作品の生命（いのち）ということ

伊藤海彦

「僕の作品もね、死んだあといちどすっかり忘れられてしまうと思うよ。」

――あれは確か詩人が北鎌倉に移られて後のことだから、昭和四十三、四年の頃ではなかったろうか。場所は明月谷、二階の書斎。季節はいつだったか覚えがない。日の暮れまぢかな窓の外は仄暗かった。何の話をしていたのだろう。私のおぼろな記憶では珍らしく詩の話……それもいわゆる現代の詩のさまざまな変り様について話していたように思う。そのとき、尾崎喜八はある間をおいて。突然冒頭の言葉を口にしたのである。

「そんなことはありませんよ」速座に私は答えたが、その私の言葉に耳傾けようともせず、詩人は窓の外に眼を逸らしながら一寸眉根を寄せるような表情でホルダーにつけた煙草を深く吸いこんだ。

しばらく沈黙があり……（その沈黙にがまんできず私は「そんなことはありませんよ」につづく、その理由をあれこれと賢しげに述べたてていたような気もする）……それから改めて詩人は視線を戻して私の顔をみつめ、ふっと話題を変えた。その眼にはもう、さっきの言葉を口にしたときのような翳はなかった。

三十年に及ぶ尾崎先生とのつきあいの中で、こうした言葉をきいたのは皆無ではないが非常に稀れなことだ。それ以前二度ほどこの言葉に近い表現を耳にしたことがあるが、それらはいずれも（忘れる人もあるかもしれないが、一方では必ず作品を愛しつづけてくれている人もあるのだ）という自信に満ちたものがその言葉の背後にあった。眼もこのときのような一種寂しげなものを漂わせていたりはしなかった。

二十代はむろんのこと、三十代になっても私は作品は作者よりも長く生きると信じていた。しかも若さの常としてそれはいささかロマンティックな衣裳におおわれ、優れた芸術は永遠とはいかぬまでもほぼそれに近い生き方をすると考えていた。しかし、五十代も終ろうとする今の私はもうそんなことはあり得ないことだと思うようになっている。そう夢みることがおそらく創造の推進力のひとつとなっているにちがいないと思いつつも、作品が作者をこえてなお果てしなく生きつづけるなどといった気持には到底なれない。（むろんこれは地球のどこかで一世紀に一人生まれでるような天才は別としての話である）……それというのも、年をとるにしたがって数多くのすぐれた芸術家の作品が嘘のように忘れられ消えてゆくのを見ているからである。少年の日々、まさに一世を風靡した人の作品がほんの一冊の文庫本として残っていればまだしも、無名の霧の彼方に消え去っているという例を私はここ十年ほどでいやという程知らされている。

と、まァ書いたものの、すべてが絶望的なことばかりではない。逆に四、五十年もの間、人の口にさえのぼらなかった作者の名と作品が突然うかびあがってくる例もある。ただ現在の私はそれを昔のように優れた作品の永生、とは思いたくない。ひとつの蘇りにはちがいないがそれは別の時間のなかで新しく生まれた子孫なのだ。

尾崎喜八という詩人としてははなはだ「らしく」ない言葉を口にしたあの時の先生の心の状態は果たしてどういうものだったのか、それは判らない。八十歳に近づきつつある肉体の一瞬の衰えがふと言わせたのか、あるいは心のすきま、影の深淵をのぞきこんでしまったためのそれはつぶやきだったのか。あれから十六、七年も経ち、当の詩人が死んでからすでに十年もたってしまった。もしもいま、先生が私の前であのつぶやきをもらしたとしたら、私はぽつりと独りごとのようにこう答えるかもしれない。――「そうですね。忘れられていいじゃありませんか。不滅の作品なんてけっして枯れない草木みたいで少し気味がわるいですよ」

実をいうと、尾崎喜八の作品は私の中で数年前から強烈に生きはじめている。生きていらしたときよりも亡くなってから尾崎喜八は「作品」そのものとして、私に強く語りかけ鼓舞し、貴重な指針を与えつづけている。……だが、それも数しれぬ先生の生々しい姿や声音などの想い出とともにやがて私の死によって消え去るだろう。そのあと、何十年か……それは判らないが、別のだれかが尾崎喜八を発見するだろう。思い出すのではなく、まったく未知のものとして。掘りかえされ、運ばれた土の中から思いもかけぬ草の種子が芽ぶくのを見いだすように。

作者とその作品。この問題は考えるとさらに矛盾した状態に入っていきそうな気がするので、もうこのくらいで筆をおくことにしたい。ここで私がいいたかったのは『尾崎喜八資料』がただ、なつかしい私たちの詩人のことを忘れられまいとするものだけであってはならないということなのだ。むしろ忘れられたあとの遠い未知の発見者たちのために続けていってもらいたいと希っているということなのだ。

雑誌『フィルハーモニー』における尾崎喜八

祝辞

博士マサリックの自由な魂によつて代表された世界の精神的文明の実験室、幾世紀にわたる強国の兜の窒息の下から昨日蘇つたばかりの潑溂として男らしい小共和国、実に国土それ自身あのドヴォルジャックの「新世界」であるチェッコスロヴァキヤは、その民族の輝かしい天禀の一つである音楽の領域で、彼等の使節とも云ふことの出来るヨーゼフ・キョエニッヒを吾々に送つた。

指揮者の台に、あの多感であつて温雅な、又実に中欧の民族に於て特に吾々が見るところの熱中と善良とを—寧ろ時に物悲しくさへ見える善良さとを自らにして身に備へたキョエニッヒを見る悦びは音楽自体に対する吾々の愛に力を添へて、その空気に又一の家族的な感じをさへ与へるのである。そして彼が、此の「最高の叡知を小児の如く語り来る芸術」を最もよく指揮する時、その最高頂の法悦の中で、吾々はまことにかの偉大なるベエトオフェンの云つた—Das Schöne zum Guten—の言葉の真に思ひ到る事いくたびであつたかを知らない。（昭和四年四月号）

音楽を聴く詩人の断片

スメタナの「モルダウ」を聴いてゐて、久しぶりに山嶽地方や川の流の詩が書きたくなつた僕は山間の泉を想つた。深い緑の森林の奥の、人跡の全く絶えた源頭を想つた。それから溪谷の渺茫を想つた。ニイチェが云つたやうな「朗かなる午前の山々」を想つた。頭からエーテルをかぶつた其の山々は初夏の太陽を浴びたところでは暑い金剛石色の光をまとひ、かげつたところでは緑が暗い襞をたたんでゐた。崖のところどころ、山躑躅が燃えてゐた。桟道の曲り角では白樺の柔かい葉が純潔に動いてゐた。谷間の深さや向うの山への距離をはかる為には、僕は孤独の郭公の歌を想像すればよかつた。清水に濡れた岩の間に、ちらちら洩れる清浄な日光をうけて淡紅の蘭の花が涼しく咲いてゐた。峠の上のまつさをな空を、よそ国の喜び悲みを映しながら、永遠の姿の白い雲が静かに高く越えてゐた。人生は遥か下の方にあつた。それは遥か下の村落で真昼の鶏の声をひゞかせながら、昼間の煙を上げてゐた。僕は労働の播き散らされた耕野を想つた。地平線のはての都会を想つた。ハイネが歌つてシュウベルトが作曲したやうな、夕暮「霧のすがた」として現れる都会を想つた。川は流れる。人生も流れる。愛する者等の思ひ出をその流程の両岸に残して……

「モルダウ」を聴いて幸福だつた。明日はリュックサックを日に当てたり、地図を整理したりしてやらうと私は思つた。

○

何事に対してもさうだが、私は音楽でも、自分の感銘を第一位に置く。テクニックの事は私には解らない。さういふ細かい専門的な批評は音楽批評家に任せる。しかし私が美と感じたものが、何と私も幸福にする事だらう。それは私を日常の苦闘から解放して、私自身の思慕である一の全く自由な道徳世界のまんなかへ私を置く。言葉を換へれば、一の全き道徳的自由の世界へ私を放つ。その世界では私の夢は直ちに私の現実である。

人が音楽会の帰りに親しい友と連れ立つてなるべく静かな道を行つたり、或は全くの一人で帰る事を好んだりするのは、やつぱり其の「夢の現実」からの覚醒の速く来るのを惧れて、其の世界での生活の持続を長めようとする心理の現れに違ひあるまい。

当時の音楽的社交界がバッハやベエトオフェンをどの位支へたかは知らないが（そしてそんな報告ならば今日吾々は山程それを持つてゐるが）、真に彼等に傾聴するものは、社交界でない個人であるだらう。彼等から秘密な懇ろな慰めや鼓舞を聴かうとして往く、華かならざる個人の裸の心であるだらう。音楽よ、ねがはくばかゝる魂を君のあらゆる仕方で薫陶せよ！

○

ダリウス・ミロオを聴きながら、ロマン・ロランの新らしい大著「ベエトホオフェン」の序文の数行を思ひ出した。ロランは其処で

音楽の世界をも亦天体の周期にたとへて、過去と現代とに就て語つてゐる。

「吾々と同様に、めぐる「時」の車輪につながれながら、単に過去を過ぎゆくものと想像する人々、精神の大時計がその正午に停まつてゐると想像する此等新らしく来た人々の素朴さに微笑しよう！　新らしい形式が永久に古い形式を抹殺し去り、彼等自身の形式だけは決して抹殺される事がないといふ幻想を抱いてゐる此等の若い世代の人々は、彼等がさう云つてゐる間に車輪が廻り、彼等の脚のまはりに既に過去の陰影がまつはりついてゐる事に気がつかないのである。

「此の影の王国の上高く吾々を揚げ高めよう！　一切は過ぎ去る。吾々はそれを知つてゐる。吾々も　君達も。吾々が信じるのもそこである。吾々が不定するのも其処である。すべての太陽も亦死ぬのである。

「けれども幾千年来、彼等の篝火は、夜の中でその使信を運ぶ事をつゞけてゐる。そして幾千年来、吾々は此等の消滅した太陽によつて照らされて来たのである。

（昭和四年六月号）

子供と音楽（一）

栄子は数へ年で五つになる。来年から初めて学校といふものへ行く。もう直ぐにクリスマスが来て、お正月が来て、雪が降つて、それからだんだん暖くなつて、庭の小梅がその鞭のやうな枝へ薄赤い小さい花をどつさり着けるやうになると、飯田町の女学校の幼稚園へ通ふ。「さうすると仏蘭西の歌を習ふのね。ダン・レ・シャルダン・ド・モン・ペエル　なんか歌ふのね。ヴィルドラック小父ちゃんの御言葉を教はるのね」さう云つて来たるべき春を楽みにしてゐる。

しかし今太陽は冬至の天へ向つて、彼の最後の南方への旅をつゞけてゐる。日光が引潮の海のやうに遠ざかる。地面は日毎に凍つて乾いてゆく。秋の万聖節の日に星をあたゝめに行くとて天へ帰つた火を、三羽の小鳥が小さい嘴で取りにゆく聖燭節は、これから未だ未だ先の二月のことだ。

十二月、大人の忽忙の生活の中に子供の世界が見えなくなる十二月。殺風景な歳の暮。しかし子供は何時だつて居る。世界は子供に充満してゐる。それが見えないやうに思はれるのは、子供の世界が大人の世界から、ちやうど冬の太陽のやうに、一時遠ざかり退いてゐるからである。此のおたがひの疎遠のあひだから、時折射して来る遠い日光のやうに、あゝ、子供の歌が聴こえて来る……

Frere Jacques, Frére Jacques,
Dormez vous? Dormez vous?……

私は二階の書斎にゐる。無数の関心事が私を強くとらへてゐる。自分の芸術のさまざまな主題が各々の解決を迫つてゐる。しかし働かねばならない。食ふために、また食はせるために。「生活がひどく面倒だ」と云つたマルセル・マルチネの言葉が今日も思ひ出される。

Sonnez les matines, sonnez les matines,
Din, din, don! Din, din, don!

歌は下から聴こえて来る。栄子が、五つになる私の娘が歌つてゐるのである。私はその開かれた幼い口を想像する。懸命に息を吸ふ彼女の咽喉を想像する。その生真面目な、真率な、歌を歌ふ時の子供の顔を想像する。子供が未だ小さいと、その歌ひ方には多くの動物らしさがある。小鳥や犬の事を思はせるその動物らしさは、大人に一つの身震ひを与へるものである。彼女がその動物らしさを失つて、大人らしさや芸術家らしさで私を幾らか困惑させるのは見だ先のことである。それは近い将来ではあるが、兎に角先のことである。今日は今日を楽むがいゝ。

歌はつゞく。子供の歌ふ「フレエル・ジャック」の三小節目から突然妻の声が飛び込む或る和声が出来る。妻の歌の又三小節目から今度は義妹の声がすべり込む。和声の色彩が一層美しくなり、三人の言葉のリトムが織物のやうになる。それは流れる。それは経過する。それは新らしく次から次へと受けとられて無限に進む。鐘の音のディン、ディン、ドーンが其の間で絶えず隠顕する。此の歌の持つ一つの雰囲気が、今や完全に成り立つ。それは何時までも続いて、遂には春にまで達するかと思はれる。これは仏蘭西である。「優雅な仏蘭西」である。

「かすかに私の頬をなでゝ吹く
まだ力よわいこの微風は、
私は知つてゐる、これが仏蘭西だ」

（ポオル・クロデル　堀口大学氏訳）

×　　×

土曜日の夕方、或は日曜の朝、ＪＯＡＫ唱歌隊の歌があると云ふ事を栄子はその母親か叔母から教へられる。時刻が来る。彼女は二階の階段の中程、ラディオの拡声器に向つて小さく陣取る。字は片仮名のほかには読めなぬのに、兎に角新聞のラディオ版をひろげてゐる。彼女は特にあのＡＫの唱歌隊に熱情を持つてゐる。それが単なる贔負と云ふものでない事は、私の観察が証明する。彼女はその合唱の中から一本の流となつて奔溢して来る或る力を受けとるのである。逞ましい声々の堂々たる行進に心臓の歩調を合せ、子供として或る名づけ難い感動を経験するのである。独唱となるとさうは行かない。「なぜ他の姉ちやんは歌はないの」と訊く。「いつ歌ふの」とたづねる。

栄子の友達に、今年九つになる井上康文君の娘愛子さんがある。或時幾つかの小学校が合同して日本青年館で音楽会をやつた。愛子さんの学校の三年の組も出た。合唱があつた。独唱もあつた。同じ組の何とかさんが、歌が上手で独唱をした。愛子さんは語る、

「あたし達、その時嬉しくつて嬉しくつて、あの方を取り巻いて涙がこぼれたわ、小父さん」

「愛子さんも独唱したくはなかつた？」

「あたし？　あたしは違ふわ。あたしは皆と一緒に歌ふはうがいゝわ」

彼女の場合では違ふのである！　彼女としては皆と一緒に歌ふ喜のはうが大きいのである！

私は斯ういふ例を沢山知つてゐる。そして年と共に斯ういふ子供が殖えてゆくのに気がつく。その子供達が大きくなつてまで尚此の気持を持つかどうかは知らない。しかし子供が殊に女の児が、概して共生的な思想（思想と云ふにしては余り柔かくて単純ではあるが）を持つてゐる事は事実らしく思はれる。彼女等の世界では、ひとり衆にぬきんでる名人たらんとする慾望が甚だ弱く、手を取り合つて共に往かうとする本能の甚だ旺盛なのを私は見るのである。

（昭和五年一月号）

子供と音楽（二）

フランツ・シューベルトの歌謡集の中で、私は『冬の旅』に深い愛を持つてゐる。それで時々、「村にて」を、「宿屋」を、「回顧」を、「孤独」を、「鴉」を、そして最も好んであの「郵便馬車」を口ずさむ。私はよく詩的精神を解した歌ひ手の美しい声で歌はれる此等の歌を、一度でもいゝから傾聴してみたいものだと思つてゐる。

「今日ショーベルの家へ来たまへ。一束の悲しい歌の花束を歌つて聴かせるから」と、或日シューベルトが友人マイルホーフェルに云つたといふ其の花束、それが此の『冬の旅』である。

私自身そろそろ鬢髪に霜をみとめるやうになつたせいかどうかは知らないが、最近此の『冬の旅』の中の「白髪の頭」といふ歌の美しさを知つて、一週間もかゝつてやつと覚えた。今その歌が私の生活の一部となる。

夕方である。私は終日取り散らした机のまはりを片づける。夜は夜で予定の仕事があるのである。硝子障子をあけはなつて、冷たい新鮮な夜気を呼び入れる。もう星が光つている。木星が牡牛星座の主星アルデバランとプレイアデスの星群の丁度間へ入つて、暗い空間に金色と紅薔薇と銀との濡れたやうな美しい宇宙の花園を作る。さういふ時間に、私はいつのまにかあの「グライゼ・コッフ」を口ずさんでゐる自分に気がつく。

下では女達が座敷の掃除を終つて夜食の仕度にかゝつてゐる。厨の方から彼女達の声や物を刻む庖丁の音がきこえて来る。石川島造船所のポーが黄昏の町の雑音にまじつて伝はつて来る。さういふ時間には或るファミリアルな、懐しい、何処か遠い世界への移住を人が皆心を合せてやつてゐるやうな気がするものである。献身といふよりも無私に近い時間運命の流を感じ得る時間である。

Vom Abendrot zum Morgenlicht……

私は自分の耳を疑ふ。今私の聴いたのは私の歌にして私の声ではない。それはもつと柔軟な、朗らか、人の耳底に浸み入るやうな子供の声である。我児の声である。いつ覚えたのかしら……私は二階の手すりを摑んで耳をすます……

Vom Abendrot zum Morgenlicht
ward Mancher Kopt zum Greise

子供は幾度も一つところを繰返す。そこから先は出来ないらしい。しかし此の僅か四小節を流れるメロディーが、此の児の意識より

も深い心緒に、何かしら訴へるものを持つてゐると思ふより他はない。「フォム・アーベントロオト」と「アー」を大きく口をあけて発音して、「ベント」から「ロオト」へ上がるところで一種の抑揚をつける。それから「マンヘル・コッフ・ツム・グライゼ」と三聯音を辿つて降りながら、コッフとグライゼとの頭に或る感じを与へたショート・モルデンテをつける。それはほとんど無意識に歌はれた音楽の恍惚世界の断片に過ぎない。それは確かに摸倣に過ぎない。しかもそれは夕暮台所で働いてゐる母親の胸に一つの愛情の波を高まらせ、たそがれの二階に宵の星空を見るともなしに見てゐる父親に多くの事を考へさせるものである。とはいへ子供は何時でも「神聖な火花」をもつた歌ばかり覚えたり愛したりはしない。彼女は父親に伴はれて、或日豊島園へ往く。ウォータァシュートがある。心を奪はれる。端艇がある。池の中を足もと覚束なく放浪する私達の哀れな端艇。それがすつかり気に入る。ブランコへも一つ一つ乗つて見ないと承知しない。何もかも体験しなくては気が済まない小さい子供につきあふ事は、異常な忍耐を必要とするものだと云ふ事に親達は気がつく。御覧！ あすこで音楽をやつてゐる。それは危ふく破裂してしまひさうな大人の忍耐力の最大限度への救ひ、方向転換の好機である。

子供は小さい音楽堂めがけて駆けつける。ビロードの服を着た「大きい兄さん達」が吹奏楽をやつてゐる。学校で化学の実験を見てゐる生徒のやうに、音楽堂を取り巻いた各種の紳士や淑女が敬虔な面持をしてその奏楽に聴き入つてゐる。此の人々の真摯な顔付に価する其の音楽を何だと思ひますか。あゝ、それは、かの「恋人よアラビアの歌を歌はう」です。一種の「枯すすき」である！

ところで私を全く困惑させ狼狽させた事件として、子供が、私の子供が、此の奏楽につれて其のメロディーを衆人環視の中で歌つたのである！ 私は真赤になる。私は子供の手をぐんぐん曳いて急いで其場を遠ざかる。野暮な親だと思はれる事は承知の上である。それどころではない！ 私は池の或る片隅の、金魚が腐る程ゐる処まで来て我児をたしなめる。「一体どこでそんな歌覚えたんだい？」「樽ころさんよ」「けつして、そんな歌を歌つちやいけません」「うん」

樽ころさんと云ふのは私の家のまはりに軒を並べてゐる酒問屋の若い衆の事である。それが倉庫へ酒樽を出し入れに来ながら、さういふ種類の歌を大声で歌ふ。子供はそれを聴き覚えたのである。

まだしも五月一日祭の歌の方がいゝ。彼女は去年の雨の日に、濡れしよぼたれて越中島へ行進する熱烈なメイデーの行列を往来で見てゐたが、帰つて来ると小さい旗をかついで、半日、あのメロディーを怒鳴りながら家の中をぐるぐる廻つたのである。

（昭和五年二月号）

緑色の服

その夕べ、家族の者たちはベエトオフェン・チクルスの最後の夜を、最も深く力に満ちた宗教的な夜を聴くために喜び勇んで出かけて行つた。あの偉大な、けだかい、また父のやうに慕はしい魂の残した響が、今も尚単純な素朴な心たちを、善への美に敏感な幼い魂らを、何とよく薫陶する事だらう！ 今日一日ほど彼女等が其の日々の仕事をよく果たした事は無かつたと云つたら、それは過言であらうか。いや、それでいゝのだと私は思ふ。それぞれの音楽が吾々に与へるエモオションの中で、ベエトオフェンの音楽のそれにも増して、吾々の生活の根本的な力と意識とを高揚し鼓舞してくれるものは無いのである。私は私として明日の夜それを浴びる。それに鍛へられる。彼女等が出て行つた後、書斎の明るい沈黙の中で、今夜の「フィデリオ」と「第九」との成功を新交響楽団と近衛氏と、東京合唱団とのために私は祈つた。

私は古いオルガンに向つた。年老いて調律すら怪くはなつてゐるが、それだけ深い愛着を持つ永年の友のオルガンである。私は積み重ねた楽譜をあれこれと手に取る。不図、今巴里にゐる友達がロマン・ロランを瑞西の家に訪問した時、ロランが彼のために古いアイルランドの民謡「黒い薔薇」といふのをピアノで弾いて聴かせたといふ事を思ひ出した。私は早速アイリッシュの民謡集を取り上げた。

アイルランドの歌のあの鬱勃たる叛逆の精神と、あの輝かしい機智と、あの仄暗い神秘とを愛する人達の、誰でも知つてゐる Sixty Irish Songs の本である。私は二つ三つ歌つて見る。それから偶然一八一頁をめくる。私は一通り其の歌を弾いてみる。いゝ。歌詞を読む。歌詞はイングランドに対する燃えるやうな反抗と愛国の熱情とに貫かれてゐる。私は弾きながら歌ふ。歌ひながら何時かひとりでに涙を流す。ひつそりした夜の中で、此の歌が私をとらへて曳きずり廻す。茲にその最初の数小節と歌詞の訳文とを掲げる事を許して頂きたい。題は「緑色の服」The wearing of the green である。

1

おゝ親しいバッディー、君は聴いたか、
広まつてゐる噂を、かたばみはアイルランドの土地に生える事を法律で禁じられたのだ。
それで聖パトリックの祭に俺達はもうあの色の着物を着られないし、あの色を見る事も出来ない。
なぜならば緑色の服を禁じる残忍な法律が出たのだ。
俺はナッパア・タンディーに逢つた、あいつは俺の手を取つて云つた、
「可哀さうな古いアイルランド、此国はどうなるんだ」と。
アイルランドは今迄在つた国の中で一番悲惨な国だ、
あいつらは緑の服を着たといふので男や女共をくびり殺してゐる。
これから俺達はイングランドの残酷な赤を着なくてはならなくなつた。
確かにアイルランドの子達は彼等の流した血を決して忘れはしないだらう。
君は帽子からかたばみを取つて、そいつを地面に捨ててもいゝ。
だがそいつは根を下して、足で踏みにじられても尚繁茂するだらう。
もしも法律が其の草の生長をとめさせて、夏になつても葉の緑が見られないやうな時でも来たら。
其時こそ俺は色を変へて赤を着る、だが其日の来るまでは、誓つて断然緑の服を着通すのだ。

（次下略）

2

此歌は一七九八年まで広くアイルランドで歌はれたといふ。酸漿草（かたばみ）は云ふまでもなく其の国民花、そして緑は其の国民色である。此の反抗と悲壮との歌に心を摑み取られながら私の思ふのは、今日の日本の歌謡作曲界の一般的な傾向の事である。又所謂民謡作家及び詩人群の自堕落な創作の態度の事である。曲と云はず詩と云はず、其処に在るのは大部分常に低い情緒に媚びかゝる歌である。聴く者の方で赤面せずには居られないやうな、真摯な家庭では其の侵入を断然拒絶したいやうな、男らしい男、女らしい女を音楽の力をかりて養はねばならないと思ふ時に、必ず当惑するやうな歌である。私は何も反抗の精神や悲壮な感情を善しとするのではない。詩人や作曲家の精神生活の深さ美しさを求めるのである。其の一層反省的な良心を、其の遥かに高くサスペンドされた芸術的意慾の緊張を、そして望み得べくんば其処から吾々のヒューマンな努力へのエネルギーを湧き立たせてさへ来る彼等の美への信仰の響を聴きたいのである。一のアイリッシュの歌は問題の機縁に過ぎない。求めるのは低くして愚かしい「ア・ラ・モード」から絶縁した、けなげな、或は野の花のやうに野性で純美な、或は天然の要素のやうに深く吾々を打つて来る歌である。

（昭和五年四月号）

ブランデンブルク・コンチェルト（第三）

始まつたらもう引留めやうもない、バッハのブランデンブルク・コンチェルト！

なにしろ大小三十六個の絃楽器の集団が、一斉に決然と立ち上がつたのだ。ませぎを外し、柵を飛ばして荒れ出した悍馬の群か、或朝アピア軍道を続々とつゞく羅馬兵の比類。どこへ往くのだか誰も知らない。しかし意力に満ちた此の出発は断言的だ。

此際、フーグの理論を持ち出すな。黙つて、寧ろひとりでに口を半分あけて、この熱ぽくて均整な偉大な音響の発展に、この炎を浴びた音楽の急流の運び去るに任せるがいゝ。このチューリンゲンの歌手の、天にもとゞく歓喜と憧れとの、海の竜巻に呑まれるがいい。

はるかに、気も遠くなるほどに優しい、天の花嫁の歌がきこえる。すると、神がゐなくなつた此世で、なほ神を見ずにはゐられない

宗教的熱狂が、炎々と燃え上がる。
外は星々の露のしたゝる秋の夜か、太陽の白昼か、こゝは神々しい銘酊、法悦。あへぎのぼる霊等の合唱讃歌だ。

（昭和五年七月号）

「第九」の初演当時を顧みて

「ウィーンの音楽的偉観のまんなかで、私の眼と私の耳とはひとへに唯一人の人に注がれてゐた。皇帝に！ ではフェランツルにか、ヨーゼフにか。否、音楽の皇帝ベエトオフェンに！ 太陽を輝かし、光明と歓びとをもたらす者、楽しい者等の中での楽しき者、悲しい者等の中での悲しき者、音楽の接吻によつて千万の心を兄弟のやうに相抱かしめる者、芸術の最も聖なる塗油の礼をさづけられて、王冠を戴いたあの頭へであつた！」

一八二五年六月、背嚢を背に百五十タアレルをポケットに、たゞ一目ベエトオフェンに会ひたいといふ熱い願に燃えて、ブレスラウからウィーンまで百里に近い山河の途を徒歩で巡礼した一青年、後の自叙伝「老オルガニストの生涯より」の著者、当時二十八歳のカルル・ゴットリープ・フロイデンベルクの、ベエトオフェンに対する此の若々しい、真摯な、ひたむきな傾倒こそ、時と処とは違つても、やはり大正年代後半の日本で、吾々芸術に専心する鬱勃たる青年の心を支配してゐた最も熱烈な感情であつたやうに思はれる。

もちろん其頃でも、ベエトオフェンの人と芸術とを伝記的に一括して、それに文学的な解釈を下して、其処からつくね上げた一個の英雄の偶像を拝跪したり其れに盲従したりする事の非を鳴らす声は、すでにところどころから上つてゐた。「ロマン・ロランのベエトオフェンの感傷的人道主義を排せよ！」――「純粋音楽を護れ！」――そしてやがては「バッハに帰れ！」

ところで当時の吾々はそれを見て、彼等の専門の領域を、彼等の音楽の秘苑を、一度は開いて覗かせた公衆の土足から、ふたゝび防衛しようとする花作りと其の特権意識を持つた保護者達との渋面だと信じてゐた。ちやうど今日、科学を通俗にまで普及しながら、ジャーナリズムの要求のまにまに固い学問を一般の歯に合ふやうに柔かくして提供しながら、他方では神聖な科学の防衛陣を固めようとする一部の学者達のやうに。しかし一度民をして知らしめた以上、彼等を無知の昔に返らせる事は出来ず、一度魔術師の水門があけられた以上、八方に流れ出した水の嵩をもう一度封じ込めて、これを門外不出の物たらしめる事は誰にも出来ない。

私は知つてゐる。ジッドを氾濫させた人々の心が、今や其の氾濫のため厭気をさして、また別の「神」を求めてゐる事を。音楽的公衆の幼稚である間はこれを巷で教育してゐた人々が、一度彼等が成人すると忽ち群をはなれて高閣にのがれ、遥かに群集を見おろして侮蔑的な神秘な呪文をとなへてゐるのを。そして私は知つてゐる。凡そ此等の事にも拘らず、人々の心に触れて其処に食入る力のあるものは其の力を振ふ事を止めず、千々にわかれ、あらゆる隅々に滲透して、思はぬ枝々に思はぬ花を開き実を結ぶことを。そしてこれこそ思想や芸術の能力であり宿命なのである。斯かる能力と宿命とを持つ思想や芸術は、従つて少数の独専家の独専、好事家の寵愛に我慢出来ない。それは遂には出て行く。衒学者の密室から広大な世界へ。其処に単純ですこやかな魂や遺賢の散らばつてゐる広々した人生の野へ。日の曙と、生活に輝く白昼と、熱い夢想の夜とを持つ打ち開けた屋外へ。in the open air！

ロマン・ロランは云つてゐる。「偉大なる音楽家の思想が吾々の内に浸入するのは感覚によつてである。それの意味するところを吾々が自分に説明するより以前に、思想そのものは吾々の肉に滲透する。そして思想が柔軟な魂を、わけても女や子供の魂のやうな柔軟な魂を、彼等の知らぬ間に薫陶するのは、実に其の至高の魔術によつてである。」(Romain Rolland: Actions de Graces Beethoven.)

兎に角、かうして音楽は瀰漫し、普及し、浸潤した。演奏会を通じ、レコードを通じ、書物を通じて。若しも演奏会のレペルトアールが貧しければ、吾々は漸く次々と輸入されるようになつたレコードを聴く事で渇を癒したり、解説書や伝記の類を読みふけつて、さうして獲た種々雑多な智識の中でそれぞれの夢の果実を実らせてゐた。レコードに対して「音楽の罐詰」といふ揶揄の言葉の出来たのも其頃であつた。だが吾々はそんな警句には平気だつた。胃の腑が丈夫で、食慾があつて、しかも食ふ物が

無かつたり、有つてもまづかつたりする時には、人は罐詰も食ふだらうし又食つて悪い道理も無かつた。それがいけなければ旨い生のを食はせてくれ、聴かせてくれ！　そして斯ういふ厭がらせを云ふ者が今度は音楽の関係者ではなくて、一部の小説家や詩人であつた事を記憶して置かう。それが罐詰であらうがなからうが、結局彼等にとつて音楽なんか何物でもなかつたのである。

しかし、それにしてもレコードでは物足らなかつた。小さい木函の長方形の孔から一様に出て来る管絃楽といふものは、たとへ吾々が如何ほどそれを頭の中で増幅し拡声しても、到底広い演奏会場で直接に聴く響と一緒には成り得なかつた。斉奏するヴァイオリンのきらめく漣は最も前線の浜辺から、ヴィオラとセロの流れの音や風音はその背後の野原だの藪地から、また澄んだ木管の鳥の声々は森林の頂から照りかゞやく金管楽器は丘の斜面から、そして打楽器の雷霆は実にあの高い雲間から落下しなければならなかつた。

此時にあたつて「新響」の演奏会は吾々にとつての唯一の教会だつた。私としては、聴くといふよりも寧ろ鼓舞されに其処へ行つた。上手下手を吟味するどころか、（又出来もしなかつたが、）其の音の宇宙に身を委ね、魂を与へ、音楽の波の揺れのまにまに深い夢に漂ふのだつた。そして幾日かの山での生活が人の赤血球の数を増すと云ふやうに、演奏会から帰つて来ると、眼には見えないが、何かしら実質的な物が自分に加へられた事を私は感じた。自分が昨日よりも一層自由になり、深く満ち、内から強くなり、鬱蒼とした者になつたやうに感じない翌日は無かつた。此の気持は幾日かつゞいた。そして再びめぐつて来る演奏会。あゝ、あの頃の日々の系列！　朝の驟雨につゞく麗らかな昼の田園風景、生活や心の悩み、しかし概して平穏で望みに満ちてゐた毎日の繰返し！　それは「パストーラル・スィンフォニー」が繰りひろげる崇高な慕はしい自然の長いがやうに長く緩やかな推移であつた……

そして私にとつてのこんな夢を現実との晴朗な時の鎖を頭はすやうに、新響はその「第九」を轟かせた。

今私に其時の感動を述べるだけの暇の無いのは残念だが、第一楽章最初の強襲が万事だつた。曾て聴いた事もないやうな不思議い深い一撃で、何処か知らぬが広い太洋の真中で眼を覚ました気がした。つゞいて次々と展開される「第九」の音楽は、すべてが珍らしく、深く巨大で、謂はゞ渾沌と光とを交互に現す宇宙的な性質を持つてゐた。アダジオ・カンタビーレで、音楽は時には綿々と、世に在つた日の思ひ出を語つてゐるかのやうだつた。しかしそれを語る声音が今では全く浄化されてゐるので、心の何処かに記憶のある其の物語も、天の炎の網をくゞつて来たもののやうに気高い神々しさをまとつてゐた。そして最後にあの合唱、天と地との永遠の契のやうなあの合唱！　九天の涯から落ちて来て人間世界に流れひろがる歓喜への頌歌！

これが私の思ひ出のあらましである。私は斯うしてベェトオフェンを自分の内に担つて来た。そして音楽による此の様な薫陶をうけた人々の、自分達の間に決して少くない事を私は信じている。こんな受け方が好いにせよ、悪いにせよ、魂の姿が最も生き生きと形作られる青春の日に、彼のやうな師を持ち得た事を私はやはり幸福だと思つてゐる。そして此際新響の古いメンバアにオールド・ラングサインを云はうとするのは、彼等に対する私の親愛と感謝との微衷に外ならない。

（昭和十一年二月号）

ニュース写真と時局下の歌

此頃の新聞のニュース写真で、「日毎に明朗化する北支」と云つたやうなイデエに纏められたいろいろのスナップを見てゐると、実際その画面から或る解放の感じが、淡いながらも或る希望のやうなもの、遠い春の明るみのやうなものがほのぼのと立昇つて、そのために一瞬間、所謂銃後の気構への表面に張りつめた氷が幾らかでもゆるみ、気持の上の堅い縛めがわづかでもほどけて、心の奥の奥の方からおのづと歌ひ出すものが有るやうな気がする。然しそれが一陽来復したあかつきに、果して予期されたやうな春であるか、或は直ぐには親みにくい、アクリマタイズするには多少時間のかゝる厳めしい春であるか、それは吾々にはわからない。だがほんの一と朝の幻影にもせよ、とにかく吾々の内心に或る救ひにも似た反射運動を起させた点で、此等の現地報告写真がほゞ其の所期の成果を収めた

とは云へるであらう。

一体今度の事変で、各新聞社や通信社の現地写真班の決死的な活躍には、寔に驚くべきものがあるが、それだけ、虎口に入つてはじめて獲ることの出来た虎児のやうな貴重な資料や逸品が少くないやうである。これは勿論その人達の日頃練達した技倆にもよる事であらうが、同時に此の運命的な大規模な戦争によつて、あらゆる形で展開される無限の被写体の深刻な啓示や刺戟から、彼等の眼が写真的にもまた道義的にも、その視野をいちじるしく深められ拡大されたであらうといふ事も考へずにはゐられない。レンズといふ光学の眼を支配する斯うした心の眼は、これを「詩人の眼」と云つてもいゝかも知れない。なぜならば、戦争や悲惨も亦それ自身の詩を拒むものではなく、其の内面の詩を方寸の裡にとらへ来つて、人々の心のうちに同様な感動をいきいきと生起させる事が出来たとしたら、写真家もまた広義の「詩人」たるに恥ぢないからである。

数多いさうした作品から今便宜上二三の例として捜し出した中に、十一月二十七日の東京朝日で見た山西省大同の子供達の写真と、十二月一日の同紙に出てゐた天津支那小学校の生徒達の写真がある。これには大分同感の人も多かつたから、敢て傑作の部類へ入れても私一人の好みとばかりは云へないやうである。

大同の子供達を写した一組のなかで「少年研ぎ屋」といふ註釈のついてゐる小さい北支将領のやうな毬栗頭の頑童や、「ボロボロなれど毛皮の外套を着た飴売りの子」といふ、甚だ温かいリマークをつけられて味噌っ歯出して笑つている子などは、見てゐるこつちまでがつい釣込まれて頬笑まずにはゐられないから妙である。「堂々（？）店を張つて皇軍将士に煙草を売る子供達」となると、頬笑ましいと同時に正に一幅の優雅の絵である。支那服を着、耳覆ひをぴんと上げた毛皮の帽子をかぶり、腰掛けて自然に開いた膝の上へ両手を置いて、悠然と小さな売台へ向つてゐる少年の態度は、その王侯貴人のやうな容貌と共に、一体どんな親達の子供かと知りたくなる程である。また此の売台の低いために身をかゞめて一箱の煙草のお客になつてゐる日本の将校らしい軍人の姿が如何にも気持がいい。そして此の微笑をたゝへた日支両国の大人と子供との向うに、もう一人商売の籠を下げて立つてゐる大同の子供の姿。その三人で醸し出してゐる雰囲気なり構図なりが、折柄の北支の冬の朝の日光を浴びて、まことに「明朗風景」の代表的なものになつてゐる。それに此の少年と云ひ、飴売の子や研屋の子供と云ひ、どの子もみんな中々立派で、べんに小生意気な処などは微塵も無く、未来の大政治家や大実業家や、智勇兼備の将軍の卵のやうに見えるから益々愉快である。

十二月八日の矢張り東京朝日へ出てゐた「北支清朗」のモンタージュの中で、或る部隊長が窮民の眼へ眼薬をさしてやつている絵もよかつた。愚直らしい田舎親爺が、椅子の、それも端の方へ遠慮がちに腰をかけて、不器用に顔を仰向けてゐる。其の顔を丸腰の部隊長殿が腕時計の光る左手でおさへて、スポイトをつまんだ方の手の小指をおやぢの顳顬の上へ軽く当てゝ安定を保ちながら、今や注入器の頭のゴムを押さうとしてゐる。これなどは実に玩味すべき内容を持つてゐる写真のやうに思はれる。徳県の街路でのゴウ・ストップの風景も別の意味で愉快である。交通整理係の印らしい白い腕章を左側へ巻いた日本の兵隊が、往来の正面を切つて、指揮棒のやうな細い棒を水平に構へて通行人を停めてゐる。指揮棒と云へば、此のロイド眼鏡をかけた堂々たる体格の兵隊さんが、どこかで見たオーケストラの楽員の一人に似てゐるのが不思議であつた。それは兎に角、此の兵隊さんと、通行人中の主要人物である手押車を押す二人の支那人とで作つてゐる構図が実にいい。三人の人物は画面一杯に大きく真直ぐに立つてゐる。兵隊さんの外套の革帯と指揮棒と二台の手押車の台とは、人物の垂直線に対する水平線になつてゐる。しかも此の直角に交る線の単調を破るかのやうに、支那人の帽子の耳覆ひと兵士の指揮棒を持つた腕とがほゞ四十五度の角度で垂れてゐる。つまり直線の組合せから成る整然とした美であつて、如何にも交通整理らしい感じがとらへてある。三人三様の表情も自然である。中味の程は分らないが、さも大事な品物のやうに鹿爪らしく手押車へくゝりつけられた細長い包の余り小さいのも、車の押し手の威儀を正した様子との対照から、此のどことなくユーモラスな画に一層のユーモアを漂せてゐるやうである。

すべて斯うした作品を見てゐると、我国の

写真術といふものが、特に新聞の報道写真の分野で非常な進歩を遂げつゝある気がする。他の分野と此れとの比較論証は別の機会に譲るが、彼等が物の真を把握するために、其の「真」のひらめきを形象の一瞬の動きの上にとらへる眼と技術には、確かに讃嘆を惜しませないものがある。しかも其処では在来の写真家の猟奇的態度や、卑俗な野心や、あたじけない狙ひのやうなものが最早や悉く清算されて、深い含蓄のある、紙背に生きるところの物のある、何等かの意味で吾々に訴へ、吾々を説得し、吾々の肩へ手を置いて共に行かうと云つてゐるやうな、日本的にユニックな詩的感覚をもつた世界人の歩みが見られるのである。

天津の支那小学校の教室内の写真五枚は、何となく好ましい映画のスティールを想はせる。子供にまじつて日本人の女の教師から日本語を習つてゐる一人の中年の支那人の、あの五分刈の頭へ眼鏡をかけた真率な顔には、なぜか知らぬが身につまされる思ひがした事であつた。洋装の女の先生が黒板へカミ、スミ、スズリ、イス、と順々に漢字の日本読みを片仮名で書いて来て、さてツクエも卒業したので白墨を置きながら、「それでは次の字は？」とでも質問した瞬間らしく、支那人の生徒が一斉に手を挙げてゐるところも美しい場面である。頬笑ましいとか、和やかだとか云ふ以上に、此の北支の少年達や日本の優しい女の先生のために、彼等のそれぞれの善き希望の達せられる事を心から祈念したい気持で此の見事な写真を眺めたのであつた。同時に映画「未完成交響楽」の学校のシーンが不図私の脳裏をかすめたのも考へてみれば嬉しい廻り合せである。

春の陽光の明るく射しこむ小さな教室での算術の時間、きらきらと眼鏡を光らせた若い貧しい小学教師シューベルトが、腕白小僧共を前に黒板へ2×1＝2と書く。そしてあの綺麗な声で「ツヴァイマール・アインス・イスト・ツヴァイ」と言ふ。すると生徒達が神妙に口を揃へて、「ツヴァイマール・アインス・イスト・ツヴァイ」と鸚鵡返しに復誦する。続いて先生は其の下へ2×2＝4と書いて、「ツヴァイマール・ツヴァイ・イスト・フィーア」と言ふ。生徒達が又口を揃へてそれを復誦する。シューベルトは次を書くつもりで黒板へ向ふ。不図見れば今書いた「二二が四」の四が、其の上の「二一二」の二と重なつて、2/4になつてゐる。シューベルトの眼が夢見るやうになる。親切な質屋の娘が窓から投げて自分に呉れた質流れのゲーテといふ詩人の詩集の中の、あの気に入りの「野薔薇（ハイデンレースライン）」へつけかけたメロディーの続きが泉のやうに流れ出して来る。天来の創造の鳥はうるはしい翼を波打たせて頭の中を飛びまはる。時を失して逃げられたら二度と再び同じ鳥にめぐり合へるかどうかは分らない。シューベルトは白墨を持ち直して黒板へくるくると高音部（クレフ）記号（ソル）を書く。それから調号を書き、音譜を並べ、暗記してゐる詩句を添へる。そして小声でそれを歌つてみる。然し次の瞬間、此の二重人格者の中の算術の教師の方が漸く意識を取りもどして、さつきから呆気にとられて気の変になつた先生をじつと見てゐた生徒達に算術の式の復誦をさせる。すると一時に生徒の声が起る。然しそれは掛算の九々の復誦ではなくて、清らかな少年のソプラノで歌ひ出される五月の丘の風のやうな、春をせゝらぐ小川のやうな、あの不朽の「野薔薇」の歌の世にも美しい斉唱である。若い貧しい無名の音楽家フランツ・シューベルトの眼がうるむ。少年達の天使のやうな声は、まるで世界を此の歌の調べで浸してしまはうとでもするかのやうに、教室に満ち、窓から洩れ、桜桃の咲き乱れた庭へ溶漾と流れ出す。其の庭を校長が通りかゝる。算術の時間であるべき教室からの一斉の歌が耳に入る。彼は立止まり、両手を握り合せ、それから手を差上げて教室めがけて突進する……

事変とニュース写真、それから筆がすべつて絵空事のやうな映画のシューベルトの事まで書きながら、必然に私の真剣な考への向ふのは、現下の時局に最もよく乗つてゐると思つてゐるらしい有名無名の作曲家や作詩者の上である。私は自分の食はず嫌ひを避けたいから、他人の理由を出来るだけ知りたいから、そして、それにはラヂオに拠るのを一番いいと考へるので、努めてラヂオをとほして新作の歌を聴いてゐる。そして悲しいかな殆どいつも、私の心は慰まない。私は歌から「歌」を聴かず、心を打たれる事もない

すべてが余りに上つ面ではないか。此の難局に黙々として各自の任務を尽くす万人にくらべて、彼等が余り皮相に軽薄ではないか。信念や操志の事はしばらく措いても、名を失

はぬため、死なぬために穂を摘む鳥の、余りに低劣に厚顔ではないか。

戦場に命を捨てる将卒の事は云はないとしても、彼等の何処にあの写真班だけの真剣さや世界眼があるだらう。何処に彼等に較べられる程の仕事の痕があるだらう。また何処にあのシューベルトの芸術家魂があるだらう。戦地写真班はジャーナリズムの一翼でありながら既に其処から一歩を進めてゐる。

シューベルトの歌は永らく作者不明の侭で、人から人、心から心へと伝はつた。電波に乗り、円盤と拡声器とをとほして広く日本国中を駆けめぐりながら、時流の最上層に浮游する彼等が、最も泡沫のやうに見えるではないか。

多くの人々は夜を日に継いで製造される彼等の歌に、今や殆ど関心を示してゐない。如何に贋負目に見ようとも、実の無い物ならざつと眼を通して、あつさり聴き流すのが落ちである。それよりも遥かに切実な関心なり興味なりは、彼等を駆つてニュース映画へと走らせる。其処では世界が息づいてゐる。直接間接吾々の心や生活に働きかけて来る諸々の要素が、速いテンポで廻転してゐる。其処から急いで取る事が出来さへすれば取る物はいくらでもある。後で思ひ出してゆつくり味へば、吾々の眼界を拡げるもの、心を喜ばせるもの、問題を提起するもの、其他様々の性質を具へたものが、獲物のやうに、糧のやうに吾々を養ふのである。

かうは云ひながらも、実は歌謡の作者達もそんな事は疾うの昔に知つてゐるのかも知れないと思ふ。たゞ「時の顧客」の註文に従つたり、或は流行を作つたりするだけの心算で遣つてゐるのかも知れないと思ふ。それなら最早や何をか謂はんやであるが、内に疼き、盛り上がり、すでに頭角を現して来た次時代の若々しい日本が、軽蔑無くして彼等を見、寛容にも彼等を問題にしてゐるかどうかを、私は頗る疑問とせずにはゐられない。

（昭和十三年一月号）

解題

祝辞

勝畑耕一

ヨーゼフ・ケーニッヒは一八七四年プラハに生れた。ドボルザーク門下で、プラハ音楽院卒業後ヨーロッパで指揮活動ののち、ペテルブルク、アソンスキー劇場の首席奏者、指揮者となる。

大正十四年日露交驩演奏会のとき来日し、昭和四年まで新交響楽団（現NHK交響楽団）の育成に努めた。この号では「ケーニッヒ氏に寄す感想」を近衛秀麿、堀内敬三たちが寄せ、氏の楽団生活三十五周年を讃えている。また四月十二日には丸ノ内中央亭で祝賀会が開かれ、野村光一の指揮、近衛のヴァイオリンで協奏曲が奏でられた。その席で新調の紋付の羽織袴が贈られ、詩人喜八もまじった記念写真もある。

ケーニッヒはその後日本を去り、昭和七年末に五十九歳で亡くなったが、翌八年二月号で氏を悼む特集が組まれている。

生前ハルピンに氏を訪ねた大津三郎にケーニッヒは「いまに提琴を仕込むから（孫を？）東京のオーケストラのコンマスにして下さい」と語ったという。余談だが大津（トロンボーン奏者）は近衛直麿（ホルン奏者）とともに新響の楽団員で、喜八の親しい友人。チェロもたしなむ。上京してきた宮沢賢治に乞われて三日間チェロを教えた。

冒頭のマサリック（一八五〇――一九三七）は哲学者、政治家。チェコスロバキア共和国建国の祖。一九一八年、オーストリア・ハンガリー帝国の解体を主張し、ワシントンでハプスブルク家からの独立を宣言した。初代大統領。

末尾のベートーヴェンの言葉は「善に通ずる美」と訳され、二作ある歌曲の題名。歌詩はゲーテ、シラーと同時代の詩人マーティソン（一七六一――一八三一）で「アディライーダ」も彼の詩に拠る。なお同名の評論が『音楽への愛と感謝』にみられる。

他の人々がすべてケーニヒと記しているのに、発音に忠実な表記を用い、キヨエニツヒとしているところが詩人らしい。

音楽を聴く詩人の断片

スメタナ「モルダウ」、ミロオ「第二交響楽的組曲」はバッハ「ニ長調組曲」、マリピエロ「幻想の東洋」とともに、この年昭和四年四月十一日に日本青年館で演奏された。

指揮者は近衛秀麿（一八九八――一九七三）この日の感動は翌日の小仏への山行をうな

がしたらしい。それは『山の絵本』所収の「山と音楽」にうかがわれる。

子供と音楽 (一)

「ダン・レ・ジャルダン・ド・モンペエル」は「お父さんのお庭で」の意。「フレエルジャック……」以下は「修道士ジャックさん、もうおやすみになりまして？」「鐘をならそう、鐘をならそう、ディンディンドン、ディンディンドン」

この号の編集後記に「近衛氏及び、詩人の尾崎喜八氏の『子供と音楽』に関する情味あふるる物語など総ての音楽インテリゲンチアへの贈物として恥かしからぬものであることを編集者として自信している。」とある。

ヴィルドラック（一八八二――一九七一）が友情（マミティエ）の使節としてコーズ夫人同伴で上高井戸の尾崎家を訪れたのが大正十五年、以後急速にアベイ派の詩人たちとの交友が拡がっていったと思われる。その事は『山の絵本』の序文にのべられている。

昭和二年九月に創刊された『バリケード』にはルネ・アルコス（一八八〇――一九五九）に捧げる詩を発表、十月号においてデュアメル（一八八四――一九六六）の「四つの譚詩」からを翻訳、解説。十一月号において「マルチネに送ったジャンド・サンプリの手紙」を翻訳している。また同号に、刊行されなかった『マルチネ論』の広告があるので、全文を引用する。

「マルセル・マルチネの名は既に日本の耳に親しんでいる。フランスのこのよき作家と親交のある尾崎喜八氏の心血を注いだ一大論文はこれだ。昭和三年劈頭、我等のバリケードはこの好個の贈物を読者の前に呈するであろう。

上脇進氏のエセーニン論と共に期待せよ！」

翌三年「銅鑼」十四号・十五号で喜八はマルチネ（一八八七――一九四四）を翻訳している。またこの年末に創刊された『学校』には、マルチネ、ロラン　ヴィルドラックの訳を含む「鉦鑼訳詩集」の広告がある。マルチネ「呪われた時代」の訳詩集も近刊として挙げられている。

この年昭和五年、片山敏彦は、肺を冒されているマルチネを二度訪問している。また「ロマンロラン友の会」のメンバーであった上田秋夫が『マルチネ詩選』を刊行している。

真壁仁の処女詩集『街の百姓』（昭和七年刊）にも、マルチネの「夜」を読んで、と副題の詩があること、その「夜」は築地小劇場で上演されたことも記しておこう。

子供と音楽 (二)

ショーベル、マイルホーフェルは現在では、ショーバー（一七九六――一八八二）マイアーホファー（一七八七――一八三六）と表記されており、ともにシューベルトの友人。前者はリストの秘書もやった人。蛇足だが詩人はシューベルト（一七九七――一八二八）と同じ誕生日。

この年昭和五年末から荏原練習所において、新響の全国向けラジオ中継放送が始まった。昭和九年末まで続いた。

緑色の服

家族の者たちがいったベエトオフェン・チクルスは、予約演奏会としてこの年一月から二月にかけて六回催された。この日の「フィデリオ」の序曲と合唱「第九」は、二月二十三日(日)に近衛の指揮で演奏された。

ちなみに独唱者は、ソプラノ荻野綾子、アルト斎藤静子、テノール湯浅永年、バス徳山璉であった。

表題のアイルランド民謡「緑色の服」は、黒のベレー帽とともに、プロテスタント農民の組織であるオレンジ団の制服。それはアイルランド地方において一八世紀末に結成された正規軍でない武力組織で、主として土地をもたないリネン労働者で形成され、一七九八年に蜂起した。

ブランデンブルク・コンチェルト（第三）

この年昭和五年（一九三〇年）はバッハ没後一八〇年で、その記念特集のために書かれた。昭和三年九月二十三日に日本青年館でこの曲は演奏されている。

「第九」の初演当時を顧みて

昭和七年を境に新交響楽団の演奏会は日本青年館から日比谷公会堂に移った。

「第九」が演奏会形式できちんと初演されたのは大正十三年十一月二十九日、東京音楽学校に於て、クローン指揮によるものである。ところで喜八はクローンの「第九」を聴いたのだろうか。昭和四十年三月号の「フィルハ

ーモニー」において次のような箇所がある。「そしてその新響とベートーベンとについての数々の思い出の中で、ヨーゼフ・ケーニヒ指揮の『第九』の初演と、ジンバリストが来日した時シフェルブラットが指揮した『エロイカ』こそ、その地下水の輝かしくも豊かな露頭をなしている。」

つまりクローンではなくて、ケーニッヒ指揮の新響による『第九』の初演をここでは指していると思われる。

オールド・ラングサインは詩人の好きな言葉。バーンズの「auld Lang Syne」からとられたらしい。「古い来しかた」と訳されて、先輩詩人高村光太郎との友情を熱っぽく歌いあげた詩もある。また水野実子との婚約中における詩「ひとり者の最後の春」にもみられる。

ニュース写真と時局下の歌

昭和九年に公開された映画としては「会議は踊る」「街の灯」「にんじん」「商船テナシー」、十年には「未完成交響楽」「外人部隊」「最後の億万長者」などがある。「未完成交響楽」の監督はウィリー・フォルスト、主役はハンス・ヤーライ、音楽はウィーンフィル。

ところでこの頃流行した唄を列挙しておこう。昭和十年「二人は若い」「野崎小唄」、十一年「忘れちゃいやよ」「ああそれなのに」「東京ラブソディ」「男の純情」、十二年「青い背広で」「人生劇場」など。このころから「軍国の母」「進行の歌」など軍歌が続々と発表された。

大正十五年、昭和元年に日本交響学協会内紛により近衛以下四十三名が脱退（残留者六名）、十月に新交響楽団を設立した。翌二年二月より定期演奏会を開始している。

音楽雑誌「フィルハーモニー」は、それにともない同年に「曲目と解説」の名で会員に配布、三年に「フィルハーモニー」として無料配布、そして四年より新たに一般にも発売された。

＊　＊

今回紹介した七編の他に翻訳が二編ある。昭和五年「ストラビンスキーとニジンスキー」昭和十五年「雲」。戦後は昭和四十年三月号で「今と昔」一編がある（「わが音楽の風光」所収）。いずれもスペースの関係で収録できなかった。

これらの音楽評論を支えた新響通いであるが、奥様によれば、入場券はいつもいただいていたそうである。前出の近衛兄弟か大津三郎からであろうか。

「フィルハーモニー」にはさまざまな音楽雑誌、音楽書の広告がのっていてそれによると「音楽評論」昭和五年十一月号に喜八の詩が掲載されているらしい。けれどその雑誌の該当する号をみつけることができなかった。

資料探索の過程で、ベートーヴェン研究家の小松雄一郎氏、安川定男先生の協力を仰いだ。末尾ながら記して感謝したい。

なお表記には、現在用いられている漢字において旧かなづかいを生かす工夫をした。

尾崎喜八の放送関係資料保存について

堀　隆雄

尾崎家には、先生の出演なさったラジオ・テレビそして自宅で録音された講演や詩の朗読のテープが十数巻保存されています。しかし、その貴重なテープも、切れやすくなったり、テープその物が変質しはじめたりで保存状態の悪い物も何巻かあります。

そんなわけで、私は現存テープのコピーを進めています。そしてコピーされたテープは、私の関係している、あるビデオ・ライブラリーで保管しています。このライブラリーは放送に使われたフィルムやビデオテープを保存する場所で温度20度湿度40％の常温で、保安上も安全な所です。

いずれにしましても、とりあえず複製テープを作っておけば災害等で貴重なお声が失われてしまう事も無くなるわけです。又、このテープから、研究者や愛好家の為にコピーを作る事も簡単に応じられるようになると思います。コピーされたテープの保存場所や方法については後日、より良い方法を、例えば公的な機関とか記念館等に入れるか考えたいと思います。又、どなたか先生のお声のテープやフィルム、ビデオ等をお持ちの方がありましたら、ぜひともコピーを取らせていただきたいと思います。

（堀氏の作製された放送目録は、次号に掲載します）

新聞・雑誌掲載目録（一）

大正四年――大正一二年

嘉納忠明・編

大正四年

小説・戯曲

「運命の人々（一幕）」　エゴ10

「巨いなる者の手（小説）」エゴ11

大正五年

小説

「愛と創作」　エゴ1

翻訳

「ベルリオッ論」（ロマン・ロラン）　白樺4

「ベルリオッ論」（同右　　）　白樺5

「ベルリオッ論」（同右　　）　白樺6

「フーゴー・ウオルフ」（ロマン・ロラン）　白樺7

「ワグネル」（ロマン・ロラン）　白樺9

「リヒアルト・シュトラウス」（ロマン・ロラン）　白樺10

「クロード・デュビュッシー」（ロマン・ロラン）　白樺11

「グレトリー」（ロマン・ロラン）　白樺12

大正六年

翻訳

「再生」（ロマン・ロラン）　白樺1

「グレトリー」（ロマン・ロラン）　白樺5

「グレトリー」（　同右　　）　白樺7

「ベルリオの手記」　白樺8

「ベルリオの手記」　白樺9

「ベルリオの手記」　白樺11

大正七年

小説

「空想家」　白樺1

「落ちたる蕾」　白樺9

評論

「ロダンの死を悼みて」　白樺1

翻訳

「ベルリオの手記と手紙」　白樺1

「ベルリオの手紙」　白樺3

「ベルリオの手記」　白樺4

「ベルリオの手記」　白樺7

「ベルリオの手記」　白樺8

「ベルリオの手記」　白樺9

「ベルリオの書翰」　白樺10

大正八年

戯曲

「ある女の死（一幕）」　白樺4

翻訳

「ベルリオの手記」　白樺2

「ベルリオの手記」　白樺3

「ホイットマン談話抄」（ワレース編）白樺5

「家庭に対する義務」（キセッペ　マッヂニ）白樺7

「ベートフェン論」（リヒヤルトワグナア）　白樺10

「ベルリオの手記」　白樺11・12合

雑記

「編輯室にて　同人」　白樺11・12合

大正九年

詩

「朝鮮詩三つ――帰路・丘の上・春が来る」　白樺4

翻訳

「メモアル（ベルリオの手記）」　白樺1

「ベルリオの手記」　白樺8

「ベルリオの手記」　白樺9

「神」（マッチーニ）　白樺10

「ベルリオの手記」　白樺11

「ベルリオの手記」　白樺12

雑記

「朝鮮より（手紙、赤羽王郎宛一九一〇・四・六」　地上9

「編輯室にて　同人」　白樺11

大正一〇年

詩

「風景――風景・スキートピー・梅雨晴れの日まで」　新詩人7

「カテージ　メイド――田舎の夕暮・少女・カテージ　メイド」　新詩人8

「野薊の娘」　新詩人10

「健康」　新詩人11・12合

「鶏」　時事新報11・13

「悦び」　詩聖12

「聖らかな木立」　時事新報12・24

「冬の宵」　時事新報12・25

評論

「十一月の詩壇月評」　日本詩人12

翻訳

「コラ　ブルニョン」（ロマン　ロラン）　白樺3

「コラ　ブルニョン」（ロマン　ロラン）　白樺4

「コラ　ブルニヨン」（ロマン　ロラン）白樺5
「ベートフェンの研究」（ベルリオ）　思想12

大正一一年

詩

「雪に輝く南大門」　詩聖1
「人に・帰り道・或る宵・井戸端・生活」　詩聖2
「冬空を称ふ」　日本詩人2
「冬の田舎」　読売新聞2・21
「空と樹木―雪どけの日から・台所・東京へ」
詩聖3
「欅に寄す」　嵐3＊
「田舎娘」　生長する星の群3
「雪どけ」　帆船3
「見知らぬ知己」　時事新報3・1
「海へ・テニスの試合」　詩聖4
「彫刻」　日本詩人4
「我が家・洗濯」　詩聖5
「橋」　嵐5＊
「自我の讃美」　詩聖6
「花壇にて」　嵐6＊
「初夏の庭」　途上に現はれるもの6＊
「炎熱の野から」　白樺7
「熱望」　生長する星の群7
「朝の散歩」　嵐7＊
「六月の周囲―緑の朝・午後六時」日本詩人7
「思ふこと」　帆船7＊
「夏雲」　途上に現はれるもの7
「日常生活――貧しき漁夫・ダリヤ・遥かに私の村が・月」　白樺8
「制作」　詩聖8
「エルハアラン祭」　日本詩人8
「花崗岩」　途上に現はれるもの8＊
「七月の夕暮」　感触8＊
「立秋の朝・樹蔭に」　白樺9
「輝く時・村の于蘭盆・しろうり・星座」　詩聖9
「ねむの花」　嵐9＊
「軍鶏」　極光9＊
「朝猟に」　日本詩人9
「光明」　詩と版画9＊
「Mizu to Sora」　ローマ字9
「蝿」　読売新聞　9・19
「樫の立木・休息」　白樺10
「初秋の讃歌」　詩聖10
「健康」　日本詩人10
「Kumori=bi」　ローマ字10
「ベートーフェン」　詩聖11
「讃美の生活」　日本詩人11
「海」　白樺12
「Shûkyô=teki na Yoi」ローマ字12

随想・雑記

「碧落荘私記」　詩聖6
「蛇窪から」　嵐6＊
「雑記」　詩聖9

評論・アンケート

「詩の選をして」　詩聖6
「新しい詩集二つ」　日本詩人8
「締切日雑記」　詩聖8
「詩をつくる用意（アンケート）」文章倶楽部8
「詩とローマ字に就て（ノートから）」　ローマ字10
「印象と雑記――『我等の詩』の矢島歓一氏」日本詩人11
「悪い先例である――詩を散文に書換へると
は」　読売新聞11・9
「印象と雑記――北原君への返事」日本詩人12
「三つの詩集」　詩聖12

翻訳

「ベートーフェンのシンフォニーの批判的研究」（ベルリオース）　思想4
「フアウストの舞踏曲に就て・『小犬派』」（ベルリオ）　詩聖6
「ロマン　ロランの手紙」（原文附）　詩聖9
「詩――寒い・大玄関の下の雛」（ヴイクトル　ユーゴー）　白樺11
「エルハアランの回想」（アンドレ　ド　ポンシュヴィユ）　白樺11

大正一二年

詩

「夜の我家」　白樺1
「野の搾乳場（日本現代詩十人集）」　詩聖1
「師走午前霜どけ路・雪割草」　日本詩人1＊
「冬木立」　極光1＊
「樹木讃仰」　白樺2
「蹄鉄打ち」　日本詩人2
「丘の上にて」　詩聖3
「Motto fukai Shizen no naka e」
ローマ字3
「最後の雪に」　読売新聞3　1
「もっと深い自然の中へ・帰宅・河口の船着」
白樺4
「私の聖日曜日」　詩聖4
「朝」　高踏詩派4
「撒水自動車」　東京朝日新聞5・7
「悦びの時――明るい窓・素朴な愛・エルハアラン読書」　詩聖6

「春の食事・くだもの」　新詩潮6＊
「Shinda kotori ni」ローマ字6
「現実・この世の生命・夕ばえに向って」詩聖7
「知己」　東京日日新聞7・4
「草上の郵便」　東京日日新聞7・14
「夏至の午後」　詩聖8
「古い来し方」　日本詩人8
「兄弟」　太陽8
「昆陽先生の墓で」　雄弁8
「親密な詩四つ（現代詩壇鳥瞰）――我家の台所・若い主婦・裏道・日の暮」　改造8
「月夜」　東京日日新聞8・8
「秋風」　〃　8・15
「充実しきって」　東京日日新聞8・25
「牧場」　読売新聞8・23
「晩夏」　〃　8・30
「秋の狩猟」　詩聖9
「悦ばしき夏――朝・烏瓜の花・西瓜・丘の家」婦人之友9
「人は生きる――蘇生の時・母・再び芸術に帰る・古典の空・もず・毛編みのジャケット・音楽」　日本詩人11
「解逅」　読売新聞12・1
「晩餐」　〃　12・5
「野外で」　〃　12・17
「冬暮の歌」　東京朝日新聞12・13

随想・雑記

「詩の会のこと」　白樺1
「Hon'yaku=sha to Gen=choshaj」ローマ字1
「Romain Rolland shi no Tegami」ローマ字2
「個人誌について」　詩聖4
「初夏の京城」　都新聞5・18～20
「盛夏雑信」　〃　8・14～19
「Nikki kara」　ローマ字8
「野の夢想」　日本詩人11
「手紙（百田宗治）」　日本詩人11

評論

「詩壇をめぐる曇天」　都新聞2・11、13、14
「『青猫』の批評的研究」　日本詩人3
「六号評論――早春の田舎から」　詩聖4
「高村光太郎論（島津謙太郎※）」　詩聖5
「六号評論――雑感」　詩聖6
「詩集『我が手を見よ』を読んで」　時事新報6・2、3、5
「六月詩壇月評」　日本詩人7
「詩集『我が手を見よ』を読んで――ヨネ野口氏の芸術の一特色」　詩と音楽（アルス出版月報）7
「詩の国土に立って」　読売新聞7・25～28
「千家元麿君の芸術に就て」　日本詩人8
「詩評に就ての断片」　東京日日新聞8・29

翻訳

「ベートーヴェン第四・八交響楽の批判的研究」（ベルリオーズ）　ラ　ミュジカ4＊
「ベルリオの『ヴェーヴーリー』の序楽」ラミュジカ＊
「ベートオフェン第九交響楽の批判的研究」（ベルリオ）　白樺5

附記　目録(一)は、尾崎が出発してから認められるに至った時期に当っている。これらに於て、詩作以外の殆どは、著書や尾崎自身の年譜から洩れており、種々の参考になることと思われる。

●表題は目次ではなく、本文のをとり、原題のままである。詩に於て、見出しタイトルが附いているものは、――を介して小題を並べ、――がないものは頭初が見出しとなっている。

●誌（紙）名の後の数字は月号（日附）。

●後尾の＊は現物未確認を示す。（探しています）

※は、北川太一「島津謙太郎のこと」（『歴程』一八七号）で尾崎喜八作と確定

目録の収集は、主として日本近代文学館、国立国会図書館所蔵によった。その他、小田原市立図書館井上康文文庫、川崎市立中原図書館、東京都美術館資料室等で御協力を得た。

後記　尾崎喜八が没してから早くも十一年の歳月が経つ。しかしいまだに蝋梅忌をはじめ、様々な催しや出版が続けられている。そうした気運に励まされて、詩人の全体像を次代の人びとに遺す一助として、この小冊子は、創刊された。題字を快諾して下さった草野心平さん、文章を頂戴した串田孫一さん、北川太一さん、かつて詩人と親しく交友された四人の方がたの暖かいご協力を深く感謝いたします。そして多忙な中で詩人の研究を進めておられる三人の研究者、在西独の勝畑耕一さん、嘉納忠明さん、放送局にお勤めの堀隆雄さんには、貴重な研究を発表していただきました。今後も様々な方の研究、回想を掲載して行きたく存じます。どうかよろしくご助力のほどを願います。（石黒）

昭和60年2月2日発行（不定期刊）／発行・尾崎喜八研究会（代表・伊藤海彦、尾崎栄子）・神奈川県鎌倉市山之内107　51／編集担当・石黒敦彦、校閲・西尚子／印刷・三栄社

非売品